

<内閣情報局部外秘資料>を読む

—戦時下の女性歌人たち、阿部静枝・今井邦子・五島美代子ほか—

新・フェミニズム批評の会の2006年4月の例会で、私は「内閣情報局は阿部静枝をどう見ていたか—戦時下における女性歌人起用の背景—（拙著『ポトナム』2006年1月・2月収録を中心に）」を報告する機会があった。内容については、上記掲載誌を読んでいただきたい。少々長いのだが、いずれはブログ上にもアップしたいと思っている。また、戦時下の女性歌人たちについては拙稿「溢れ出た女たちの戦争詠」（『女たちの戦争責任』（東京堂出版 2004年）を参照して欲しい。

私の報告で、参加者一多くは日本の近現代の女性文学に関心のある方々なのだが—が興味を示されたのは、やはり、内閣情報局発行の部外秘資料『最近に於ける婦人執筆者に関する調査』（1941年7月）であった。私が友人からコピーを入手したのは2年前であったが、同じ資料はすでに、国立国会図書館憲政資料室の山口美代子さんが山川菊栄を例に資料の内容に言及されていた（山口美代子「近代女性史史料探訪」『参考書誌研究』40号 1991年11月）。以降、まだあまり紹介もされていないし、研究素材にもなっていないようなのだが、見かけた方はお教えいただければ幸いである。

この冊子資料（75頁）の内容を紹介しよう。表紙には、内閣情報局第一部とあるが、執筆者は記載されておらず、不明である。凡例によれば「昭和15年5月～16年4月の一年間の八大婦人雑誌の主な婦人執筆者の質的・量的方面から考察し輿論指導の参考資料として調査した」旨の記載がある。調査対象雑誌の「八大婦人雑誌」とは、主婦之友（122万）、婦人倶楽部（98万）、婦人公論19.3万）、婦人之友（8.5万）、新女苑6.4万）、婦人朝日（3～5万）、婦女界（2.9万）、婦人画報（1.8万）で、カッコ内の数字が資料での発行部数である。量的考察の部分では、各誌の執筆者のある記事・文章・作品・座談などを小説・評論、随筆、報告、感想・座談・自伝・詩歌のジャンル別の篇数と執筆者数による雑誌全体の傾向と特色が示される。現代の発行部数とは隔世の感があるが、上位2誌の大衆・家庭・娯楽雑誌の要素を兼ね備えているとする。婦人公論と新女苑は総合・文化雑誌的で知的水準が高いとし、ともに一流の小説家の作品を擁しているとする。知性水準において、2誌を追うものが婦人朝日、婦女界であるとして、後者はとくに未婚婦人を対象とし、婦人画報は有閑階級が対象であるとし、婦人之友は独特の友の会方式を採り営利的でないのが、それぞれの特徴であるとしている。

この調査資料の特色は、質的な考察では各誌の執筆陣の特徴にも言及しているが、その前提として、女性執筆者を歌人・作家・評論家・その他として分けた上で、執筆篇数の多い順に、対象の1年間における各人ごとの著作目録が作成されていることである。私は必要があつて、評論家に分類されているが、歌人でもある「阿部静枝」の目録を出来る限り現物と照合したところ、採録されていない2篇を見出した。が、全体的にみて、1年間限りとはいえ、この時期の貴重な書誌であろうと思う。さらに、資料の執筆者は自らの分析・考察を披瀝するが、当時の各婦人雑誌の編集者へのインタビュー取材を踏まえ、編集者としての評価をも記録にとどめている点である。

この資料について、さらに、女性歌人を例に、もう少し詳しく紹介したいと思う。次の表のように、主婦之友、婦人之友には歌人は登場しなかった。歌人の寄稿が多いのは婦女界、婦人画報であり、短歌作品を載せる頻度が高いのは婦女界であることがわかる。女性歌人で、3篇以上寄稿しているのは、今井、五島、茅野、柳原の4人、1・2篇の歌人が

杉浦、四賀、築地、中河、山川（北見志保子）、若山ということになる。なお、歌人であり、この資料では評論家として扱われ、私が別稿で触れた「阿部静枝」も参考までに掲載した。歌人以外に仕分けされた執筆者で、篇数が多いのは、評論家では宮本百合子 22 点、羽仁もと子、山川菊栄が 19 点、奥むめお、竹内茂代 9 点であり、阿部静枝の位置づけもわからう。小説家では、林芙美子、吉屋信子が 16 点、中里恒子 10 点、窪川稲子 9 点と続く。当時の女性雑誌における女性執筆者の様相がイメージできる。プロレタリア作家や昭和初期から労働運動、政治活動に携わってきた論者も執筆者の上位を占めているのがよく分かる。阿部静枝も例に漏れないのだが、詳細は冒頭に示した別稿に譲る

今井邦子（1890~1948）は、諏訪から文学を目指して上京、短い新聞記者時代を経て、同僚の今井健彦と結婚、出産後の身体障害、育児、夫の政治家への転身・背信、家庭と文学の両立などに苦悩しながら、『アララギ』で島木赤彦、後、斎藤茂吉に師事、1936 年『明日香』を自ら主宰、歌人の地位を確立、当時は華やかな名流婦人としても注目されていた。五島美代子（1899~1974）は、『心の花』の佐佐木信綱に師事、夫の経済学者五島茂と結婚、ともどもプロレタリア短歌に拠るが、1938 年『立春』を創刊、1940 年当時は『新風十人』により脚光を浴びていた。茅野雅子（1880~1946）は、明星派新進歌人として与謝野晶子・山川登美子と『恋衣』を刊、歌人、ドイツ文学者の茅野蕭々と結婚、自らも 1921 年からは日本女子大学の教壇に立っていた。柳原燐子（1885~1967）は、華族との離婚後、佐佐木信綱に師事、九州の炭鉱主と再婚するが、満たされない想いが募り出奔、後弁護士の宮崎龍介と結婚、情熱的な短歌を詠み続けていた。

調査資料の執筆者は、歌人の中では、上記の五島と若山喜志子（1888~1968）に着目し、五島について「何よりもものの見方が純粹で、主義主張に依り乱される事なく、女性の文化教養面に関して」もっと表面に出て欲しい旨、期待を寄せている。若山については「女性の情操の陶冶に欠くべからざる人」と評価している。これらの女性歌人たちは、「短歌」作品を寄稿する方がむしろ珍しく、随筆であり、古典鑑賞であり、自伝であったりする方が多いことに気づかされる。女性歌人に期待されるのは「教養」「情操」的要素であって、歌人としての力量よりも「名流婦人」の肩書きと華やかさではなかったのかとさえ考えられる。歌人に関しては編集者の評価は記載されていなかったのが残念ではあった。

この情報統制側の本音やその愚かさを露呈する資料への興味は尽きない。IT時代の現代にあって、統制や規制はより深く潜行する部分と共謀罪や「君が代」の強制に象徴される露骨さがない交ぜになって、国民の無抵抗を助長するのが怖ろしい。